

「ヨハネによる序言(3)」

ヨハ1:14~18

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

①ルカによる献呈の辞、ヨハネによる序言(1)と(2)を終えた。

②今回は、ヨハネによる序言(3)である(ヨハ1:14~18)。

(2) ヨハネによる序言についてのコメント

(例話) ペリー先生のアドバイス(最後に序言を書け!)

①ヨハネは、歴史的出来事を書いた後に、神学的論考を付け加えたのであろう。

②ヨハネの序言は、この福音書を読み終わってから読むと、より分かる。

2. アウトライン(14~19節)

(1) 受肉の事実(14節)

(2) 挿入句(15節)

(3) 受肉の解説(16~18節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 栄光という言葉の意味

(3) 神の臨在の個人的体験

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. 受肉の事実(14節)

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

1. 「ことばは」(ロゴス)

(1) ヨハネの福音書では、1:1と1:14にしか出てこない。

①他の福音記者たちは、メシアを「ことば」とは呼んでいない。

②「ことば」に関する解説は、2つの部分に分れる。

③前半(1~13節)

* 「ことば」の永遠性と、神性

* 「ことば」は、宇宙の創造主である。

④後半(14~18節)

* 「ことば」の歴史への介入

2. 「人となって」

「ことばは人となって、」(新改訳)

「言は肉体となり、」(口語訳)

「言は肉となって、」(新改訳)

(1) 神から人間に変わったということではない。

①ことばの神性に人間性が付加された。

(2) 人間のような姿になられた(見えた)ということでもない。

①ことばは、完全に人間性を持たれた。

(3) この人間性と罪とは無関係である。

①本来の人間性は、罪のないものである。

(4) これを神学的には「受肉(Incarnation)」と呼ぶ。

①キリスト教信仰の基本的合意事項である。

②この事実は、自動的に他の救いの可能性をすべて排除する。

③初期の信者たちは、この信仰のゆえに殉教の死を遂げて行った。

④1 ヨハ4:2~3

「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです」

3. 目撃者の証言

「私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。」(新改訳)

「わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、」(口語訳)

「わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、」(新共同訳)

(例話) 中学時代の社会科の授業で、ジンギスカンについての情報を得た。

これは、目撃者の情報である。

(例話) 大学時代の寮生活で、イエスについての情報を得た。

これは、情報を信じた人の情報である。情報源は、イエスの弟子たちにある。

(1) 「私たち」とは誰か。

- ①イエスの公生涯の目撃者たち
- ②ヨハネを含む信者の共同体
- ③14節は、目撃者の証言。

(2) 彼らは何を見たのか。

- ①「住む」「宿る」は、ギリシア語で「スケイノオウ」という動詞である。
- ②ヘブル語のシャカイナと関係のあるギリシア語である。
- ③直訳は、「テントを張った」「幕屋を張った」である。
- ④ロゴス(神性を持った方)が幕屋(人性)の中に宿った。

(3) ヘブル的背景(絵画的説明)

- ①出エジプト記に出てくる幕屋と、メシアの受肉の相関関係
- ②荒野の旅において、イスラエルの民の間に幕屋があった。

「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた」(出40:34)

* 奴隷から自由の民へ

* 幕屋は、神がともにおられることの証拠となった。

* 幕屋には、シャカイナグローリーが満ちた。

* 目に見えない神の臨在を示す現象である。

- ③人生の荒野において、私たちの間に神の幕屋がある。

* イエスは、目に見えない神の臨在を示すお方である。

(4) 「父のみもとから来られたひとり子」

- ①「ひとり子」はギリシア語で「モノゲネイス」である。
- ②One and Only, Unique
- ③ヨハネは、「神から遣わされた使者」である。
- ④ロゴスは、「父のみもとから来られた比類なき御子」である。

(5) 「恵みとまことに満ちておられた」

- ①「恵み」とは、ヘブル語で「ヘセッド」(契約への忠実さ、契約に基づく愛)。
- ②「まこと」とは、ヘブル語で「エメット」(揺るがされることのないお方)。

③この2つは、神の基本的な性質でもある。

II. 挿入句(15節)

「ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです』

1. 挿入句の意味

(1) 時間的にはヨハネはイエスよりも先に登場した。

- ①誕生において
- ②奉仕において

(2) しかし、イエスの存在と奉仕は、ヨハネに先んじていた。

2. 挿入句の目的

(1) ヨハネの影響を受けた人たちの誤解を解くため

(2) 「光」についてのコメント。太陽と月の関係。

III. 受肉の解説(16~18節)

1. 16節

「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである」

(1) 再び、「私たち」(共同体の体験)が出てくる。

(2) 「恵みの上にさらに恵みを受けた」

- ①へブル的表現であろう。
- ②「Holy of Holies」「Song of Songs」「King of Kings」

2. 17節

「というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」

(1) 2つの時代の対比

- ①律法の時代と恵みの時代の対比
- ②「律法」という言葉には、否定的意味はない。
- ③人類救済計画は、順を追って実行に移された。

- ④律法の時代もまた、恵みにあふれていた時代である。
- ⑤犠牲のいけにえは、神との平和を回復するための方法であった。
- ⑥パリサイ人たちの問題は、律法の誤用にあった。

3. 18節

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」

- (1) ヘブル的には、神を見ることは死を意味した。
 - ①旧約聖書には、神を見たと思われる人物が登場する(モーセ、イザヤ)。
 - ②しかし、彼らが見たのは神ご自身ではなく、シャカイナグローリーである。
- (2) メシアは、究極的なシャカイナグローリーである。

結論：

1. ユダヤ人にとってのロゴス(アラム語のメムラ)

- (1) メムラは、神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある(1節)。
 - ①三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。
- (2) メムラは、天地創造に参加されたお方である(3節)。
- (3) メムラは、救いの代理人(agent)、仲介者である(12節)。
- (4) メムラは、神の栄光の表れ(シャカイナグローリー)である(14節)。
- (5) メムラは、契約の仲介者である(17節)。
- (6) メムラは、啓示の仲介者である(18節)

2. 栄光という言葉の意味

- (1) ヨハネの福音書では、「栄光」と「時(十字架の時)」がリンクしている。

①7:30

「そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである」

②12:23

「すると、イエスは彼らに答えて言われた。『人の子が栄光を受けるその時が来ました』

⑬13:1

「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」

(2) 「栄光を見た」の内容(6段階で考える必要がある)

- ①誕生
- ②公生涯(変貌のメシア)
- ③十字架(これがクライマックス)
- ④復活(十字架の有効性を証明した)
- ⑤昇天(大祭司としての働き)
- ⑥再臨(クリスチャンの希望)

3. 神の臨在の個人的体験

- (1) イスラエルの民の体験(抽象的なものではなかった)
- (2) 「私たち」(ヨハネを含む共同体)の体験(現実的なものであった)
- (3) 神の臨在が個人的現実となる必要がある。
(例話) 母の死について(悲しみと安堵)
(例話) 被災地の悲劇について